

の要求を飲みながらも、のらりくらの対応でした。銀、金と言った財や大切にしている物を渡したくありませんし、家族をさし出すことなど、できない相談なのです。彼は、これを国の長老達を集めて、アラムの王の要求を断れなかった経緯も伝えたのです。長老達もわかってくれ、承諾しないでくださいというのでした。

②アラム王への伝言 (9)「そこで、彼はベン・ハダデの使者たちに言った。『王に言ってくれ。<初めに、あなたが、このしもべに言ってよこされたことはすべて、そのようにするが、このたびのことはできません。>』使者たちは帰って行って、このことを報告した。』アハブはベン・ハダデの使者たちに、最初の要求は飲むけれど、さらに加えられた要求については、とてもできない、という旨を伝えたのです。使者たちは、これを王であるハダデに伝えました。

③ハダデとアハブの対立 (10~12)「するとベン・ハダデは、彼のところに人をやって言わせた。『サマリヤのちりが私に従うすべての民の手を満たすほどでもあったら、神々がこの私を幾重にも罰せられるように。』そこでイスラエルの王は答えて言った。『彼にこう伝えてくれ。<武装しようとする者は、武装を解く者のように誇ってはならない。>』ベン・ハダデは、このことばを聞いたとき、王たちと仮小屋で酒を飲んでいたが、家来たちに、『配置につけ』と命じたので、彼らは、この町に向かう配置についた。」ハダデは怒り、使者を送り、サマリヤが破壊されて生じるちりが、自軍が満たすほどに少なくあれば神々が罰するように、というのです。つまり、それほどの大軍を連れていくというのです。すると、アハブも対立して返し、傲慢になるなど伝えたのです。酒を飲んでいたハダデは怒り、軍を所定の位置につかせました。

3. 預言者を通してのメッセージ (13~15)

①預言者の来訪 (13)「ちょうどそのころ、ひとりの預言者がイスラエルの王アハブに近づいて言った。『主はこう仰せられる。<あなたはこれのおびたしい大軍を見たか。見よ。わたしは、きょう、これをあなたの手に引き渡す。あなたは、わたしこそ主であることを知ろう。>』」この預言者はエリヤではありません。彼は主のことばとして、アラムの大軍を、イスラエルの手に引き渡すと伝えたのです。それは、アハブがイスラエルの神が主であることを知るためだというメッセージだということです。

②若い者たち (14)「アハブが、『それはだれによってでしょうか。』と尋ねると、その預言者は言った。『主はこう仰せられる。<諸国の首長に属する若い者たちによって。>』アハブが、『だれが戦いをしかけるのでしょうか。』と尋ねると、『あなただ』と答えた。」そして、その戦いには勇敢な若者たちが各地から立てられて、それがなされていくというのです。だからこそ、消極的になるのではなく、イス

ラエル側から先制攻撃をするべきことも伝えられました。

③戦える人々の数 (15)「彼が諸国の首長に属する若い者たちを調べてみると、二百三十二人いた。そのほか、民の全部、すなわちイスラエル人全部を調べたところ、七千人いた。」アハブがイスラエル各地の戦いに出られる若者を調べてみると、232人いました。また、さらに調べると、イスラエル人で戦いに出られるのは7000人いたということです。

《結論》

今朝の聖書箇所には、エリヤが出てきません。今回の当教会での学びは列王記第一を通して、「エリヤの生涯」を学ぶことでしたので、飛ばして次の章に行っても良いのですが、今朝はこの部分から主の語りかけをいただきたいと思います。

それにしても、この章に出てくるアハブ王は、これまでの様子が違います。

おかれた状況が異なれば、立場も変わり、その性格の異なった部分がうか

がえます。あのバアル信仰の推進役のイゼベルも、強国の前には形無しといった感じさえ受けます。もっとも、本人はここに登場していませんが。イスラエルの国が、アラムの前にも軍力において、相当に押されていたということでありましょう。

しかし、ここにおいて主は、ひとりの預言者を送られて、アハブ王を励まされているのです。アラムの王ベン・ハダデは大軍を率いて、イスラエルを襲うというのです。その言葉に対して、預言者を通して、主はイスラエルの軍が勝利させると伝えられたのです。それもイスラエルの中から若い勇士を集めて、戦いに向かわせてくださるということです。

どういふことでしょうか。主なる神は、信仰者に対して恵み深い方です。か。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益とさせていただきますことを、私たちは知っています。」(ローマ8:28)とある通りです。にもかかわらず、ここにおいては、偶像神バアルを妻イゼベルと一緒に信奉して、国民にもその信仰を持たせようとしているイスラエルのアハブ王を主は応援しようとしておられるのです。いったいなぜなのでしょう。

それは、「あなたは、わたしこそ主であることを知ろう」(13節)とあるように、この出来事を通して、アハブが主に立ち返ることを願っておられるということでありましょう。神の民であるイスラエルの王として、アハブがバアルを拝していることは、大きな罪です。しかし、ここにおいてアハブが主に立ち返ることを主は心から願っておられるのです。イエス・キリストは、税金取りの頭であった罪

人ザアカイの家を訪問された時、彼は短い時間に取り扱われて救われました。その時に主は言われたのです。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。人の子は、失われた人を捜して救うためにきたのです」(ルカ 19:9-10)。主は罪をどこまでも憎まれ、罪人をどこまでも愛してくださる主です。主は不信仰なアハブにも手を差し伸べてくださる主なのです。「罪人は、正しい者のつどいに立てず、その道は滅び失せる」(詩篇 1:5, 6)とありますが、どうしようもない罪人に手を差し伸べてくださる主でもあります。考えてみれば、私たちはすべからず罪人(ローマ 3:23)です。そんな者たちを決して、見捨ててはおられないということ、アハブへの語りかけにおいて学べるのではないのでしょうか。主は弱く罪に誘われやすく、罪に苦しむあなたにも、手を伸べてくださっているのです。今こそ主の前に出ていきましょう。